

児童教育学科

学科長

戸 江 茂 博

DOE Shigehiro

第9回国際教育フォーラム2014

2014年6月28日(土)に第9回国際教育フォーラムが開催されました。国際教育フォーラムは、児童教育分野と幼児教育分野をほぼ隔年で実施してきていますが、本年度第9回は、幼児教育分野を中心に、世界的に活躍されている教育学者、教育実践者をお招きして、「幼児教育の本質とは～グローバルな視点からの問いかけ～」というテーマのもとに、世界的な視野から幼児教育の本来の在り方、幼児教育の本質を考えるフォーラムとしました。

基調講演は、「幼児教育の本質を探る～ケアと教育の統合に向けて～」と題し、カナダのトロント大学附属幼稚園・小学校校長であるエリザベス・モーレイ氏が行いました。モーレイ氏はこれまでたびたび本国際教育フォーラムに登壇していただいております。幼稚園から小学校への連続的な学びや成長について深い認識と該博な知識を有しておられます。本年度はとくに幼児教育の在り方に視点を置いて、幼児教育の在るべき姿について持論を展開してくださいました。モーレイ氏はトロント大学附属実験校(ICS)で校長を務められている経験を踏まえ、カナダ・オンタリオ州におけるケアと教育を統合する幼稚園の取り組みから、ケアと教育を一つにしたプログラムの有効性について理論的かつ実践的な視点から語られました。幼児期の中心的な活動である遊び活動の大切さについて、遊ぶことを学ぶ子ども、学ぶために遊ぶ子どもの姿を描かれるとともに、幼児期においては基礎的な学習能力を高めるのと同じくらい、子どもが自分の中に自信をはぐくみ、自尊感情を高めることが重要であることを指摘されました。幼児教育の土台として、Belonging(自分の居場所があると感じる)、Expression(表現すること)、

Well-being(健全な心と体)、Engagement(深くかかわること、夢中になって主体的に学ぶこと)の四つを明らかにされたことが強く印象に残ります。

モーレイ氏の基調講演に引き続き、パネル・ディスカッションが行われました。テーマは、基調講演を受け、「グローバルな視点から幼児教育の本質を探る」でした。パネラーは、カナダのイズリントン初等中等学校のティム・カミノ副校長、カナダのトロントにあるワールドルフスクールの校長であるウォーレン・コーエン氏、イタリアのマリアコンソラトリーチェ認可幼稚園園長であるイザベッラ・ヴァッリ氏の各氏でした。カミノ氏は、子どもの探究心が幼児教育の核心となることを主張し、幼児期ならではの読み、書きなどの具体的な指導法を紹介しながら、バランスのとれた国語教育、英語を第二言語とする子どもたちへの対応などを中心にお話されました。コーエン氏は、長年にわたるシュタイナー教育の理論と実践を踏まえ、シュタイナーの幼児教育の実際に触れながら、幼児期にとっての本質的な体験として、愛情とあたたかさのはぐくみ、感覚を育てる環境の大切さ、創造的で芸術的な体験、自由な想像の遊びなどについて語ってくださいました。また、ヴァッリ氏は、幼児期の人間の尊重を基盤として、子どもが現実世界を見いだし、現実世界に対する興味や関心を持つことができるように支援することが幼児教育において最も大切であること、そして、ケアから教育が生まれること、ケアと教育は切り離すことができないことを熱弁してくださいました。すべてのパネラーが、幼児期ならではの、世界との出会い体験の重要性を指摘されました。パネル・ディスカッションでは、基調講演者のモーレイ氏も討議に参画して下さり、幼児教育の本質をめぐって豊かな議論が展開されました。

パネル・ディスカッションの終盤では、アレックス・カルディ氏（イタリアのマリアコンソラトリーチェ認可幼稚園副園長）が指定討論者として議論に加わったり、特別ゲストとして参加いただいた中国の東北師範大学教授（教育部幼稚園園長養成センター長）である柳海民氏と同大学教授（教育学部長）である姚偉氏が中国の幼児教育の現状を語っていただきました。実に国際色豊かな議論が展開され、ディスカッションが大いに盛り上がりました。

当日は、本学学生や大学院生のほか、兵庫県内外の幼児教育関係者、教育委員会関係者、大学の研究者など多くの参加者を得、活発な意見交流と実りある議論が展開され、有意義なフォーラムとなりました。